お隣さん。

朔良梨里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お隣さん。

【Ｎコード】
Ｎ５２１４Ｋ

【作者名】
朔良梨里

【あらすじ】
ある日のこと。私はお隣さんにおすそ分けをしにいった。まさか、あんなことが起こってるなんて微塵も思わずに――。

窓から夕日が差し込み、部屋が茜色に染まった。
鴉がなき、虫の声も聞こえる。
いつもどおりの、夕方だった。
そう、いつもどおりのはずだった。
机に向かって、宿題をしていると、
「夕里子ぉ、田中さんちに、梨を持っていってくれない？」
一階から、母の声がした。
どうやらお使いのようだ。仕方がない。
「はぁい。今行く」
と、自分の部屋を出て、一階に降りた。
リビングに行くと、すぐ入ったところに母が立っていた。
母は困っているようで、
「この梨なんだけど…」
母の足元には、袋につめられた、大量の梨があった。
「うわぁ。どうしたの？この梨…」
それがね、と母は話し始めた。
「おばあちゃんから送られてきたのよ。なんでもね、お隣さんがたくさんおすそ分けしてくれたんですって。…もう、食べないからってこっちにまわしてこなくってもねぇ…」
少し憤慨しているようだ。
いつもよりもしわが増えている。
本人には言えないけれど。

それでも確かに母の気持ちも分かる。
「確かに…多いね」
「じゃあ、頼んだから」
母はそういうと、袋を私に渡した。
ずっしりとした重さが腕から伝わる。
「はぁ。めんどくさいなぁ」
ため息をつきながら、玄関に向かい、靴を履き、家の外に出た。
ドアを開けると、涼しい風が頬をなでた。
袋を抱えなおし、隣の家に向かう。

お隣さんの田中さん一家は、不思議な家庭だ。
真理近所付き合いはしないタイプのようで、行事ごとのときでも、あまり見かけない。
そして母子家庭で。
娘さんの真理子ちゃんも変わっている。
そう。
変わっている。

道から田中さん家をのぞくと、真理子ちゃんが一人で地面を掘っていた。
大きな、大きな穴を。
「何やってるの？」
「あ、夕里子おねえちゃんだ」
話しかけると、真理子ちゃんはにっこりと笑ってくれた。
「あのね、穴をほってるの」
「そうなんだ。何のために掘ってるのかなぁ？」

真理子ちゃんは、うーん、としばらく考えてから、こう言った。
「あのね、おはかをつくるの。おっきなおはか」
「そう…なんだ…」
笑顔で答える真理子ちゃんは、ちょっぴり不気味に見えた。
「夕里子おねえちゃんが持ってる梨、くれるの？」
「うん、そうだよ」
「真理子、そんなにたべれないよ。あははっ」
「え」
「だって、真理子だけじゃ、ちょっとしかたべれないもん」
そう言うと真理子ちゃんは、地面を見た。
少し寒気がした。
そうだ、梨を———。
再び穴を掘りだした真理子ちゃんに、再び話しかけた。
「お母さんはいる？」
すると、
「うん。家の中」
「そっか、ありがとう」
そうだ。
早くこの梨を渡して、家に帰ろう。
今日はいつもどおりの、普通の日なんだから。
さぁ、この扉を開けて———。

「こんばんはぁ」
家の中からは声がしなかった。
心なしか、なにか生臭いにおいがする気がする。
もう一度、大きな声で言ってみる。
「こんばんはぁ」
しかし、声はなかった。
それに、人のいる気配もない。
「どうしたのかなぁ」
真理子ちゃんが言うには、お母さんはいるはずだ。
しかも今は夕方。
たいていの家庭では夕食を作る時間だ。
辺りを見回していると、さらに生臭いにおいがしてきた。
「田中さん！？」
さらに大きな声で呼んでみる。
そう、魚をさばいたときのような、においが。
急に不安が押し寄せてきた。
心臓がばくばくする。
靴を脱いで、リビングと思われる部屋のドアの前に駆け寄った。
「ここ…かな？」
さらににおいはきつくなっていた。
震える手で、ドアノブを握る。
大丈夫。
今日はただの普通の日なんだから。
そう。
このにおいはきっと、魚をさばいているからなんだ。
声や物音がしないのは、きっと、疲れて居眠りでもしているに違いない。
でも普通、料理の途中で寝たりする？

ああ、こんなこと考えちゃだめだ。
でもさっきの真理子ちゃんの笑顔が思い浮かんで…。

カチャ

ゆっくりとドアを開ける。
そぉっと。
中をのぞいてみる。
特に変わった様子はない。
テーブルがあって、ソファーがあって。
でも、むわっとしたにおいがしてくる。
いや、これは料理の…。
部屋の中に入る。
あれ？
ソファーの向こうに何かが見える。
黒くて、赤くて…。
近寄ってみる。
一歩、一歩ふみだして。
それは。

「いっ、いぃいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

何で？
何で？
何でっ？
何で真理子ちゃんのお母さん、こんなことになってるの！
手とか、足とかついてなくて、ばらばらでっ！
顔なんか、こっちの方に転がってくるっ！
ぐしゃぐしゃで、真っ赤でっ！

「何……で……？」

その場に座り込む。
とたん、気持ちが悪くなった。
どうして……？

「一緒に遊んだだけだよ」

「え？」

恐る恐る振り返る。
そこには、恐ろしいほど満面の笑顔を浮かべた、真理子ちゃんがいた。
手には大きな包丁があって……。

「ただたんに、お人形遊びをしてただけだよ」
「だからって……こんな……」
「だってね？お人形はばらばらにしてももとどおりにできるんだよ？だからお母さんだって、元にもどるはずでしょ？」
「そ、そんなわけ…無いじゃない！あなたのお母さんは人間なのよ！？そんなことしたら…死んじゃうのよっ！！」
気持ちが悪い気持ちが悪い気持ちが悪い。

「でも、もしかしたらうまくいくかもしれないって思ったの。だから挑戦してみたんだよ」
「そん…な…」
真理子ちゃんの瞳のあまりの冷たさにぞっとした。
真理子ちゃんは包丁を私の顔の前に突き出して、言った。
「ねぇ……。おねえちゃんも真理子とアソボウヨ。くすすっ」
「やっ。やだぁあぁ」
逃げたくても、足が動かない。
「…ぁ」
「ねぇ。どうしたの？早く遊ぼうよ」
悪魔だ。
悪魔の顔と包丁が目の前に見える。
「やめ…」
「さぁ。イッショニアソボ？」

「どうしたのかしら……夕里子ったら。ずいぶんと遅いわねぇ」
壁にかかった時計に目をやる。
「しかたがないわね」
お隣へと向かう。
たぶん、真理子ちゃんと一緒に遊んでいるのだろう。
「あら…？」
お隣の庭で目にしたのは、一人で穴を掘っている真理子ちゃんの姿だった。
「どうしたの？」
「あ、おばさん」

真理子ちゃんが顔を上げる。
「真理子、おねえちゃんとあそんでたんだよ」
「あらそう。夕里子は？」
「家の中だよ」
「そう、ありがとう。それじゃあ、おじゃましていくわね」
ドアノブに手をかける。
「ねぇ、おばさん」
「え？」

「おばさんも真理子とアソバナイ？」

（後書き）

子どもの好奇心や純真さって、たまに怖いときがありますよね。それをイメージしてみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5214k/

お隣さん。

2010年10月8日15時06分発行